畦道

永井荷風

青空文庫

国府台から中山を過ぎて船橋の方へと松林に蔽はれた一脈の丘陵が延長してゐる。丘陵に沿うてはひろ〳〵＼した平野が或は高く或は低く、ゆるやかに起伏して、単調な眺望にところ〳〵＼画興を催すに足るべき変化を示してゐる。

市川に移り住んでから、わたくしは殆ど毎日のやうに処を定めずそのあたりの田舎道を歩み、人家に遠い松林の中または窪地の草むらに身を没して、青空と雲とを仰ぎ、小鳥と風のさゝやきを聞き、初夏の永い日にさへその暮れかけるのを惜しむやうなこともあつた。

然しわたくしの眺めて娯しむ此辺の風景は、特に推賞して人を誘つて見に行くべき種類のものではない。謂はゆる名所の風景ではない。例へば松林の間を貫く坂道のふもとに水が流れてゐて、朽ちた橋の下に女が野菜を洗つてゐるとか、或は葉鶏頭の淋し気に立つてゐる農家の庭に、秋の日を浴びながら二三人の女が莚を敷いて物の種を干してゐるとか、又は、林の間から夕日のあたつてゐる遠くの畠を眺めて豆の花や野菜の葉の色をめづると云ふやうな事で。一言すれば田舎のどこへ行つても見ることの出来る、いかにも田舎らしい、穏かな、平凡な風景。画を習ひ初めた学生のカンバスには一度は必ず上されるべき風景に過ぎない。特徴のないだけ、平凡であるだけ、激しい讃美の情に責めつけられないだけ、これ等の眺望は却て一層の慰安と親愛とを催させる。普段着のまゝのつくろはない女の姿を簾外に見る趣にも譬へられるであらう。

東京にゐる友達の一人に、わたくしは散策の所感を書いて送つた。すると某友は返書を寄せたのみならず、ある日ふらりと尋ねて来て、「わたしもあの辺の田舎道にはいさゝか思出があるのです。法華経寺の奥の院からすこし行くと競馬場があつたのですが、戦争後はどうなつたでせう。」と言つた。

「競馬場は今でもそのまゝ残つてゐるやうです。然しペンキ塗のあの建物と、無線電信の鉄柱は、むかし向嶋の風景を見に行つた人達が蔵前と鐘ヶ淵の烟突をいやがつたやうなもので、わたしは成りたけあゝいふ物の見えない方面を歩くことにしてゐます。」

「イヤ全くさうですよ。あなたの御手紙を読んで、わたしの思出したのもまづさういふやうな事なのです。わたしは後にも先にも競馬場なんぞへは、たつた一度あの中山へ連れられて行つた事があるだけです。戦争前の事でしたから、早いものです。もう十年になります。最初に結婚した女ですがね。その女は競馬がすきでした。競馬にかぎらず、世間の人の噂をする処へは、芝居でもダンスホールでも、海水浴でも、どこへでも行きたがる女でした。わたしはまた反対に、競馬にかぎらず、相撲でも野球でも、何に限らず勝負事には少しも興味を持つてゐません。見てゐる中にすぐ飽きてしまふ方なんです。貰つてから間もない頃のことでしたから、勧められるがまゝ、まアどんなものか行つて見やうといふ気になつて、細君と二人自動車に乗つて行つたのです。小春日和の風もない好い日でした。日本より外には世界中どこへ行つてもこんな好い天気は見られまいと思はれるやうな初冬の或日でした。道はよく覚えてゐませんが、江戸川を渡つて国道らしい舗装された広い道を暫く行くと、やがて道の一方には遠く海の方まで続いてゐる水田が見え初める。片側はどこまで行つても同じやうに、人家の後方に松林がつゞいてゐます。とある道を曲ると、松林の間の崖を切り開いたやうな緩やかな坂があつて、登りきると、目のとゞくかぎり広々した畠です。地平線の

上に白い雲が浮んでゐるばかり。東京の町中から突然この広い眺望を目にすると、覚えず胸がひらけて、清涼な空気が肺臓に浸みわたるやうな気がしました。と思ふ間もなく、人の叫ぶ声がだんだん近く聞えて、車は競馬場の門前につきました。降りて見ると、どつちを見たらいゝのかと迷ふほど、畠と林の眺望はます〳〵好いのです。冬の初のことで、白菜と大根の軟い緑の葉が、日の光を浴びて天鵞絨のやうに輝き、松の林の間々にこんもりと茂つた樹木の梢は、薄く色づいてゐます。わたしは競馬場がなかつたら、この辺の風景は一層よく見えるだらう。ふと、そんな心持のしたのが、そも〳〵其日の喜劇のはじまりでした。場内に入らない先から、わたしは競馬なんぞ見る気がしなくなつてゐたのです。自動車の砂ほこりや見物人の雑沓がいかにも荒々しく、田園の風致を毀損するやうに思はれて腹が立つて来るのでした。桟敷の席で一二番勝負を見てゐましたが一向おもしろくないどころか、いやで〳〵たまりません。する中細君は知つてゐる人達に出会ひ、共々馬を見に行きました。わたしはつまらない賭け事に昂奮する細君の顔や様子を見てゐるのも気辛いし、湧き返るやうな場内一帯の騒しさにも堪へられなくなつて、そのまゝふらりと人込みにまぎれて門を出て、馬場の石塀に添うた一筋道を、茅葺屋根の見える方へと歩いて行つたのです。透き通るやうな小春の空に穏かな日光を浴びながら聳えてゐる樹木の姿が、全く其時には言葉に言へないほど美しく見えたのです。その辺の生垣に咲き乱れてゐる山茶花と菊の花とは塵埃の多い東京の庭で見るものとはちがひ、洗つたやうに鮮な色つやを誇つてゐます。農家の庭では手拭に顔を包んだ娘達が稲をこいでゐます。荷車の通る道端を鶏が歩いてゐます。目に入るものは何も彼も画になつてゐます。朽ちかけた納屋も、古井戸も、投捨てゝある農具までが、田園の平和と幸福とを示すものゝやうに思はれるのです。鈴なりに真赤な柿のなつてゐる木の下に、竹の椅子と木の台とを出して、牛乳を売つてゐる茅葺屋根の家が目につきました。木立の奥に牛の鳴く声がします。牧場があるのでせう。腰を掛けて牛乳を呑むと、東京で売つてゐるものとは、まるで品質がちがひます。わたしは同じ家庭を持つなら東京の町中よりもいつそ斯うした田舎に住まつて見たい。軒の深い藁家の縁先で、雀と共に冬日を浴びながら、本でもよんでゐたい。然しあの細君では——競馬や麻雀の好きな細君ではとても話にはなるまい。ろく〳〵交際もせず、言はゞ媒介口で貰つた細君だから、気立の合はないのも仕様がないと、わたしは何やら憂鬱になつて、傍に立つてゐる榎の梢から木の葉の閃き落るのを眺めてゐました。すると、これも競馬を見に来たらしい東京風の洋装した若い女が一人牛乳屋の椅子に腰をかけました。年は二十二三。ぬいだ上衣をハンドバツグと一緒に小脇に抱へ、鼠色のスカートに白い毛糸のスエーターを着てゐたので、小ぶとりの身体の殊に張出した胸の形がそのまゝはつきり思ひやられます。あとから来る連の人でも待つのかと思ふと、一向そんな様子もありません。女は牛乳を一口。それから煙草に火をつけたが二三度吸ひかけて地面に投げすて、じれつたさうに踏みにじつたりして、何か知ら落ちついては居られないと云ふやうな様子振り。牛乳の代を払つて、ぢきに立つて行きました。時計を見るとまだなか〳〵競馬の終る時間にはなりさうもありません。わたしは安心して畠の中の小道に曲り、草枯れのした畦道を方角定めず林の見える方へと歩いて見ました。耕された土から、二三寸芽を出してゐるのは麦でせう。人参と大根とは其葉の形で都

会生れのわたしにも容易にそれと見分けられます。牛蒡の葉は蕗のやうにひろがり、白菜はいかにも軟かさうに真白な葉裏の茎を日に曝してゐます。轍の跡の深く刻まれた畦道は行くに従つて次第に低くなると共に、両側の畠は次第に高く、やがて見上げられるやうになつて、一列に唐黍の茎の立並んだ土地の側面は、尾花や小笹の生茂つた崖になつてゐました。歩いて来た方を振り返つて見ると、競馬場の建物も農家の屋根も崖に遮られて見えず、道の行手は松林の梢にその眺望を限られてゐます。土地は更に一段低くなつて、また同じやうに畠がつゞいてゐるのでせう。然し畠の仕事は今が手すきの時節なのか、人は一人も通りません。わたしは霜枯れした草の間にも何やら小さな花をつけた雑草があるのを見つけて、それを摘まうと腰を下して両足を投出しました。崖をうしろにした此の窪地は風も吹き通はず小鳥の声も聞えず、小春の日光の照り輝くばかり。その暖なことは帽子を冠つた頭が忽ちむづ〳〵痒くなつて来るほどでした。わたしは何の聯絡もなく、ふと村の娘が明い昼中に好きな男と忍逢ふのは、野中のかう云ふ場所かも知れないと思つたのです。途方もない馬鹿気た想像かも知れませんが、あまりの静けさと、明さと、暖さとに、わたしは自分ながら訳のわからない事を空想しはじめたのです。田園の昼の静けさは夜よりも却て若いものゝ心を刺戟するにちがひはない。都会では醜く思はれる事も田園で行はれゝば忽美しい詩中の光景に変じてしまふ……こんな事を空想してゐた時、わたしは意外にも先程牛乳屋の腰掛で見かけた白いスヱーターの女がどの道を辿つて来たのか、わたしの休んでゐる方へと歩いてくるのを見たのです。女は草の上にわたしの寐転んでゐるのを見て、少し歩調をゆるめたものゝ、俄に後戻りをすれば却てわざとらしく思はれる。と云つて曲る道もない。いやでもわたしの傍を歩み過ぎなければならない。わたしは此の場合の気まづさを推察して、此方から事もなげに言葉を掛けてやつたのです。

「先程は。」

女は余儀なさゝうに笑顔を見せました。

「今日は競馬ですか。」

「えゝ。」

「もうお帰り？」

「えゝ。」と女は立止ると共にハンケチで額の汗を押へました。

「歩くと暑いくらゐですね。まアお休みなさい。虫も蟻もゐません。」

「あの、電車までまだなか〳〵でせうか。」

「さア、たいした事もないでせう。誰か通つたらきいて見ませう。」

女はくたぶれたと見えて、わたしと向ひ合に、けれども、すこし離れた処に腰を下し、スカートを引延すやうにして膝をかくした。わたしは今まで耽りつゞけてゐた空想の夢から、まだすつかり目が覚めてゐません。日の光に照しつけられてゐる身の暖さは炬燵にでも入つてゐるやうで、見知らぬ若い女の身近にゐることが唯無暗に嬉しくてならない気がするのです。

「あの牛乳は上等でしたね。」

「えゝ。」と女はもぢ〳〵してゐる。

「友達につれられて初て見に行つたんですが、わたし見たやうなものには居られません。さうざうしくつて。あなた。お好きですか。賑なところが……。」

女は黙つて、又もや余儀なさゝうに笑顔をつくつた。わたしはど

うかして、もすこし心やすくならうと思ひ、
「一人で見にいらしつたんですか。」と話しかける。
「いゝえ。えゝ。」
「わたしは友達を置き去りにして出て来たんです。捜してゐるかも知れません。」
「まア。」と女は初て此方へ向き直り、暫くして、「わたしもお友達と来たんですけど……。」
「さうですか。ぢや、やつぱり競馬の趣味はお好きぢやないんですね。」
女は愛嬌を見せながら何とも言はない。私は寄添つて手でも握つて見たいやうな気になつた。振払はれやうが、声を立てられやうが、人の知らない野中の窪地である。このまゝ二度と顔を見合せなければ何をしやうと構はないわけだ。この心持を察したものか、女は立上りさうに思はれましたから、わたしも共に起直り、歩けば一緒に歩かうといふ姿勢を見せたのです。すると、女はどうしたのか、立ちもせず、却て半身を斜に片手を草の上につきましたから、それを機会に、その傍に歩み寄り、蹲踞むが否や手を握りました。
後になつて知つた話ですが、此日女はやはり男と連立つて競馬場に行つた。ところが場内でその男は知合ひの芸者らしい女に会つて、話をしはじめた。その様子がどう見ても何か訳がありさうに思はれたので、女は前後の考なく、男への面当にふいと外へ出てしまつたのだといふ話でした。その時には何も知らう筈がありませんから、わたしは連れ立つて駅へ出る道をさがす振をして、畠や林の中の小径をあちこちと、わざとさうでない方向へと歩いて行つたのです。
女は踵の高い靴をはいてゐましたから、とある松原の中で一休みした時には大分くたぶれたらしく秋の日脚が傾きかゝつて来たにも気がつかず、わたしが手を取つて抱き起してやるまで草の上に足を投出すやうな始末でした。三度目に芒の茂つた中に休んだ時には、笹の葉にそよぐ風の音が少しく耳立ち、日はもう低くなつてゐました。
その晩、わたしは其女をつれて市川の宿屋へ泊つてしまつたのです。十年前の話ですから、わたしもまだ四十にはなつてゐません。そんな事から初の細君と別れて、その女とつい此の間まで一緒にくらしてゐたのです。偶然畦道で出会つて、偶然林の中で冒険に成功した最初の思出が、永く心の底に残されてゐて、それがために其後いろ〳〵迷惑な事情が起つたにも係らず、わたしはなかなか思切れなかつたのです。慎しみのない女の軽はずみな行動ほど、われ〳〵のやうな男の心を誘惑するものはありません。御手紙であの辺の景色を思出しました。あの時、どこをどう歩いたか、畠や林がそのまゝ残つてゐたら、樹の姿や畦道の曲りぐあひなどで、その場所を思出すことができるだらうと思ふのです。」

わたしは友達とつれ立つて、彼が十年前の夢の跡をさがしにと、散歩に出かけた。

青空文庫情報

底本：「ふるさと文学館　第一三巻　【千葉】」ぎょうせい
　　1994（平成6）年11月15日初版発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：H.YAM
校正：米田
2011年1月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

畦道

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/